
ブラザーCOMPLEX

はにはな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザーCOMPLEX

【Nコード】

N5488D

【作者名】

はにはな

【あらすじ】

親の再婚でアニキと俺に義理の妹が出来た。それからアニキの俺への執着はひどくなって……！？

アニキと俺と愛佳（前書き）

BLにするかしないかまだ決めていないのですが、BL風味なので苦手な方はご注意ください。

アニキと俺と愛佳

「帰るぞイサ」

低い重圧のある声。なのにとどこか色気がある。

…そう評したのはうちのクラスのやつだっただろうか。

「アニキ、わざわざ迎えに来なくていいって言ってるのに…」
ため息をついて俺は椅子から立ち上がる。

廊下へ出るとアニキは俺のクラスの奴らにつかまっていた。

「郡山先輩、これ調理実習で作ったんです。食べてください」

「あたしのも食べてください」

「あたしのも」

……おい、俺が授業中にクッキー（になるはずだったもの）を焦がしたとき、一つもくれなかっただろおまえら。

……俺はまたため息をつく。

こいつらが騒ぐのも無理はない。

アニキは顔がいい。

高く整った鼻。切れ長の目。少しとがったあご。
中学生時代バレーをやっていたためか背も高い。
その上成績は全国でも上位に入るくらいイイ。
そして先週付き合っていた彼女と別れた。

……俺はまたまたため息をつく。

別れた原因は……。

もしかすると俺……なのだろうか。

「お兄ちゃんおかえり」

長い黒髪が腰のところでふわりと揺れる。
大きな目が子犬のようで可愛い。

家に帰ると愛佳が嬉しそうな顔で迎えてくれた。

「…そのお兄ちゃんに俺も入ってるのか？」

見とれていた俺の横で、低い声を一段と低くしたアニキが嫌そうにつぶやく。

「あんたに言うわけないでしょ。あたしは勇雄お兄ちゃんに言ったの。あんたなんか翔良で十分。」

こおりやま　しょうりょう、あーもうなんて長くて言いにくい名前かしら」

「……親に言え」

「た、ただいま愛佳。そ、そうだアニキ、クッキー貰ってただろ。愛佳にあげたら？アニキ甘いの手手だろ」

「コイツにやるくらいなら近所のガキにやるほうがまだ」

「あたしだってあんたにもらうくらいならそこの河岸で浮浪者のフリして道行く人に恵んでもらったほうがマシだわ。」

言いあっている二人の間に火花が見える。

……ああもうつくため息もない。

先週アニキと俺の父親が再婚した。

相手は愛佳の母親だ。

よほど相性が悪いのだろう。一緒に暮らして以来この二人はずっとこんな調子だった。

………何かが唇に当たる感触がする。

「ん」

………なんだろう？……まあ……いいか……ねむ……い……

。

「……………勇雄おにーちゃん」

「……………ん」

俺は身じろぎして目を覚ました。

「お兄ちゃん、起きた？夕ご飯のお買い物行かない？」

「愛佳……………」

さっきのは気のせいだったのだろうか。

俺はうたたねしていたソファーから身を起こした。

「今日も愛佳が作ってくれるのか？」

そういつて笑うと愛佳の顔が少し赤くなった。

「う、うん。ごめんね昨日は失敗しちゃって」

昨日から両親は新婚旅行に行っている。

そのため昨日の晩御飯は愛佳が作ってくれたのだが、どうやら料理はあまりやったことがなかったようだ。アニキにこっぴどくけなされていた。もちろん愛佳も言い返していたのだが。

今日はそのリベンジだろうか。

「うん、いいよ。行こうか」

俺がそう言つと愛佳は嬉しそに笑った。

……………可愛い。

ほんとうに可愛い。

両親の離婚で三年もの間男所帯だったせいか、俺は一つ下の中学に通う愛佳がはじめから可愛いくて仕方がなかった。

「今日もマズイ飯を食わすつもりか」

玄関で靴を履いていると2階からアニキが降りてきた。

「っつ。今日は失敗しないわよ！」

愛佳が真っ赤になって怒鳴る。

「昨日の今日で何を言ってるんだ。一日で料理が上手くなるわけが

ないだろう。」

そう言つとアニキは愛佳の持っていた靴を奪つて階段上へとほうり投げた。

「あゝっ。なにすんのよ!」

そしてアニキは俺の腕を掴むとドアを開けて走りだした。

「ア、アニキ?」

「あつ、ちよつと。嘘。翔良のばかっ!」

愛佳の叫び声は近所中に鳴り響いた。

「…………アニキ。ちよつと…ひどい…だろ、さっきの…は…」

俺は息を切らしながら問い掛ける。

「何がた。」

アニキは息一つ切らしていない。スーパーまで歩いて15分の距離を全力で走ってきたのにもかかわらず…だ。いや、全力だったのは俺だけか。アニキにずっと手を離してもらえずに引きずられた。

「愛佳と一緒に行くつて、俺約束したのに」

「あのマズイ飯をまた食いたいのか」

昨日の晩御飯の味を思い出したのか、アニキが嫌な顔をする。

確かにアニキに作ってもらったほうが旨いだろう。

親父が再婚する前はアニキが家事をほとんどやっていた。親父と俺が無器用だったからだ。

「…………いーんだよ。最初から上手く作れる奴なんていないんだから。一生懸命作ってくれるだけで嬉しいんだ」

そう言つと俺はカゴをもつて店内へと入った。

ポンポン。

後ろからアニキが俺の頭をなでた。

「なっ…にすんだよアニキ!」

「いや、いい子に育ったなと思って」

はぁー！？

訳わかんねえ。

つか、目立つことするな。ただでさえアニキは人目を集めるんだ。

ああ、店内の主婦の視線が痛い…。

アニキと一緒にいると目立って仕方がない。いや、目立っているのはアニキだけが。

でも一人でいるとその他大勢に埋もれてしまう俺としては、あまり人の目にはさらされたくない。

これだからアニキと出かけるのは嫌なんだ。

「イサ」

「ん？」

アニキは俺の肩に手を置くと俺を上からのぞきこんだ。

……俺を上から見るな。

俺の背が低く感じるだろ。いや俺は平均的だ。アニキが高すぎるんだ。

「なんだよ？」

「オレも義母さんが来る前は一生懸命作ってたぞ」

……。

なんだ？

愛佳と競ってるのか？

アニキも以外と子供っぽいところがあるんだな。

「…なに笑ってるんだイサ」

「え…いや」

バレた。声には出して笑わなかったのに。肩が震えてれば分かるか。「分かってるよアニキ、すごく感謝してる」

三年前、母は離婚届けを置いて男と駆け落ちした。俺達を置いて。俺は中学に入学したばかりで、アニキが中学3年生の時だった。ほとんどの家事をアニキがやってくれた。受験勉強もあってさぞ大変だっただろう。

俺も出来る限り手伝っていたのだが、手伝いになっていたかどうかはあやしいところだ……。

「親父が再婚してくれてよかったよな。今度はアニキ、受験勉強に専念できるな」

「勉強なんかしなくても受かるさ」

……今、全国の受験生を敵に回したぞアニキ。

「親父の再婚はいい。よくもあんな美人の嫁を見つけたものだ」

だよな。よくやったぜ親父。おかげであんな可愛い妹までできて…。

「だがあのガキはよけいだ」

「……………」

冷静な顔で人をけなすアニキが怖い。否定したいけど黙っとこう。

ごめん愛佳。

「えーと、今日は何食べる？アニキ」

触らぬ神に祟りなしだ。

「……………つかれた」

昨日はあれから散々だった。愛佳は拗ねてご飯を食べないし、アニキは必要以上に俺を構ってきた。そしてなぜか愛佳はますます拗ねた。

愛佳が家に来てからアニキの俺への執着がひどくなったような気がする。もともとブラコンぎみだったアニキは母親が出ていってからですます俺に構うようになった。親父が仕事で忙しかったから、その分アニキが構ってくれたのだと思う。

でも愛佳が来てからのアニキの俺への構いかたは異常だった。

学校への登下校も一緒にしたがるし、愛佳と話していると不機嫌になる。昨日のスーパーへ行くときにしてもそうだ。おかしいだろ？

兄弟で手を繋ぐなんて。高校生にもなつてだぞ。

こういうのは何て言うんだっけ。母親に赤ん坊が出来た時に上の子供がするやつ。そう、赤ん坊帰り。

赤ん坊帰り……。うわ、なんてアニキに似合わない言葉なんだ。

「郡山、なに変な顔してんだ？」

「柳ヶ瀬」

変な顔してたのか俺。うー、恥ずかしい。

柳ヶ瀬は中学からの友達だ。歯に衣をきせない性格でたまに周りが引いたりするが、裏表のない性格で付き合いやすかった。スポーツ刈りで爽やかな顔立ちのせいか、けっこうモテる。

「いや、まあいつもの顔とそんなに変わらないから気にすんな。」

俺が少し赤くなったせいかな柳ヶ瀬が余計なフオーをいれる。いや、そのほうが気になるだろ。ショックだろ。いつも変な顔してるのか！？俺！！

「お前がモテるのに彼女出来ない訳がわかった……」

この悪気はないけど口の悪いのが原因だ。

コイツと付き合うには頑丈な心臓が必要だろう。俺も何度心にキズを付けられたことが……。もう結構なれたけど。

「何失礼なこと言っただお前。それより真橋さんが呼んでるぞ、郡山」

失礼なのはお前だ！！

……つて、真橋さん！？

「呼んでるなら早く言え！！」

「わりい。お前が変な顔してるから忘れてた」

…まだ言うか。

もうイイ。こいつには構わないでおこう。それより真橋さんだ。

俺に何の用だろう。

俺は急いで廊下へと向かった。

廊下に出ると真橋さんは窓から外を覗いていた。そして俺に気付い

たのかゆつくりと振り返った。

…… やっぱり綺麗な人だな。

真橋さんは3年生の中で一番の美人だと言われ有名だった。

肩までの軟らかな髪が開いた窓からの風にゆれる。顔に付いた髪を避ける仕種さえも可愛い。

「勇雄くん、お昼休みに呼び出してごめんね。ちょっと付き合ってくれるかな」

「…… はい」

でも俺はこの人が苦手だった。

同じ可愛いなら愛佳のほうが全然可愛い。

真橋さんはアニキがいるときは優しくだったが、俺一人の時は少しつめたかった。アニキが自分より俺を構うのが嫌だったのだらう。

真橋さんはアニキの元彼女だった。

元彼女と俺とアニキ

「勇雄くん、あたしと付き合ってくれないかな？」

「……………真橋さん？」

昼休み、真橋さんに連れられて屋上にきた俺は信じられない告白に驚いていた。アニキと付き合っていた時、真橋さんはアニキにべた惚れだった。別れたからといってすぐ元彼氏の弟に惚れるものだろうか。

そもそもアニキを選んだ時点で俺に惚れないだろう。……………って、やめよう。考えたらむなしくなってきた。

「どうかな？」

黙っている俺に焦れたのか真橋さんが問い掛ける。

俺は真つすぐに真橋さんを見て言った。

「真橋さん、俺のこと好きじゃないですよ。俺、好かれてもいいない人と付き合えません」

「……………」

図星だったのだろう。真橋さんは顔を真つ赤にして言葉に詰まった。それでも気を取り直して俺につめ寄った。

「だって勇雄くんと付き合えば郡山くんのおうちに行けるでしょ？それに勇雄くんいつも翔良くんと一緒にいるじゃない。」

いつもいつも！あたし、勇雄くんのせいで翔良くんとあまり会えなかったんだよ？そのせいでふられたんだ。だから勇雄くんといれば翔良くんのそばにいられるよね。そしたら翔良くん、きつとあたしのこと好きになってくれる。あたし達が別れたの勇雄くんのせいなんだよ。勇雄くんさえいなかったら翔良くん、きつとあたしのことみてくれた。だからそれくらい協力してくれるよね？」

「……………」

なにを言ってるんだろう。よく分からない。

たしかに真橋さんと付き合っているときもアニキは俺を優先していた。どこに出掛けるにもまず俺を誘った。

……でも。俺と付き合っただとしても、アニキが真橋さんを好きになるわけじゃない。結局傷つくのは真橋さんじゃないだろうか。

「……できません」

「どうして!？」

真橋さんは涙目で俺の両腕を掴んだ。

「あたしがあんたみたいなのと付き合っただけでいいよ。……あんたは翔良くんのおまけでしかないんだからね!! 自分のこと分かってるの!?! あんたに断る権利なんかないんだから!!」

「……っ」

……つかまれた腕がいたい。

いや……。

心が……いたい……。

「勇雄」

真橋さんは弾かれたように声のした方へと振り返った。

「……………翔良くん!!」

アニキは真橋さんを見ない。

「勇雄、搜したぞ早く来い」

「アニキ……」

今の話を聞かれたらどうか。だとしたら少しいたたまれない。いや、それよりも真橋さんが……

「翔良くん、あのね、あたしね……」

真橋さんは駆け寄ってアニキの腕を掴もうとした。

その手をアニキが振り払う。

……うわ、怒ってる。たぶん話を聞いていたんだろう。

「勇雄、行くぞ」

アニキは俺の肩を押して歩きだした。

「待つてよ翔良くん!!」

真橋さんはなおも言い募る。

呼び止められてもアニキは一切振り向こうとしない。

「あたしのこと少しは好きで付き合ってくれたんでしょ!? だったら勇雄くんじゃなくてあたしもっと会ってくれたら、きっとあたしのこと好きになってくれる!!! だから……!!」

「……逆だ。勇雄がいるからお前と付き合った。」

「……え?」

「付き合うのは誰でも良かった。お前じゃなくてもかまわなかった」

真橋さんは目を見開いた。

両目からは涙が流れている。

なにを言ってるんだ? アニキ。

「アニキ、もういい。真橋さん泣いて……」

「二度と話しかけるな。オレにも、勇雄にも」

「……!!」

「アニキ!!」

「いくぞ」

真橋さんを残して、アニキに押し出されるように俺は屋上を後にした。

アニキは最後まで真橋さんを見ようとはしなかった。

キンコーンカーンコーン……

5時限目のチャイムが鳴る。

バタバタと教室へ急ぐ生徒達の足音がする。

でも俺は教室へと続く渡り廊下で足を止めた。

アニキも立ち止まる。

「勇雄？」

「……アニキ、ああいう言い方やめてくれ。真橋さん絶対傷ついてる」

「お前が傷つけられていたのに？」

「俺はいいんだ。……でも人が傷つくのは嫌だ。見たくない」

身内が人を傷つけて平気でいられるような人間だとは思いたくない。さっきのは明らかに俺を傷つけた報復だろう。あんなに容赦のないアニキは初めてだった。

「…………俺は、お前が傷つくのは嫌だ。傷つけるのが誰であろう

と……俺であろうと」

何を言ってるんだろう。アニキが俺を傷つける訳ないじゃないか。

「……アニキ？」

アニキの手が俺の髪に、頬に触れる。

「なに……」

何をしてるんだと言おうとした瞬間、俺はアニキな抱きすくめられた。

……ホントに何してるんだろうアニキ。俺なんか抱きしめて楽しいのか？

俺は抱きしめられたまま固まってしまった。

んーと、ああそうか。俺が傷つけられて落ち込んでると思って慰めてるんだ。なんだ、びっくりした。

俺はアニキの背中を軽く二度たたいた。

「アニキ、慰めてくれなくても大丈夫だよ。早く教室に戻ろう。授業始まる」

「……いいから黙って抱きしめさせてろ」

「アニキ？」

「少しでいい……」

「

俺とアニキと回想シーン

「真橋さん何の用だったんだ？」

5時限目が終わると同時に柳ヶ瀬が話しかけてきた。俺が授業に遅れてしまったせいか、気にしてくれていたようだ。

俺は少しだけ柳ヶ瀬から目をそらして答える。

「いや、別にたいした用じゃないよ」

「そうか。ならいいけど」

よかった。突っ込んで聞かれなくて。あんまり言いたい話じゃない。

「そういえば郡山が行った後すぐ、お前のアニキが来たぞ」

「アニキが？」

「真橋さんに呼ばれてどこかに行きました。って伝えたけど、お前会った？」

そういえば、アニキが屋上に来たときに捜したって言ってたよな。何か用があったんだろうか。

「さっきアニキに会ったよ。でも何も言ってなかったけどな。いいや、帰りにでも聞いてみる」

俺がそう言つと柳ヶ瀬は真面目な顔をして腕組みをした。

何だ？こんな顔するなんて珍しい。

「……………なあ、郡山」

「何だよ」

「ここ最近、放課後にお前のアニキが迎えに来るのは何でだ？」

「……………」

柳ヶ瀬の不躰な質問で俺は思い出したくないことを思い出していた。

愛佳達が引つ越してきた晩のことだった。

『イサ、入るぞ』

俺が寝ようとしてフトンをかぶった時、アニキが部屋に入ってきた。

『アニキ、なに?』

俺はすぐ眠くて、ベットに寝たまま返事をした。そのベット脇にアニキが腰掛ける。

『イサ、明日から放課後迎えに行く。教室で待っている』

『……なんで?』

『明日からは一緒に下校する』

俺は眠気も忘れて跳び起きた。

『な、なんでだよ!?なんでアニキと一緒になんだよ!?』

『……お前が先に帰ると愛佳と二人きりになるからだ』

親父も義母も共働きで夕方過ぎ迄働いている。家に一番早く帰ってくるのは愛佳だった。

確かに俺がアニキより早く帰れば愛佳と二人きりになるだろう。でもそれが何か悪いのか?俺が愛佳に何かするとも思っているのか?いくら可愛いくても義妹だぞ。

『なんだよそれ。訳わかんねえ。いいじゃないか愛佳と二人になっても。俺、アニキが教室に迎えに来るなんて嫌だからな!!』

怒鳴った瞬間俺はベットに押し倒された。

『アニキ?』

『愛佳とあまり二人になるな』

『なんで……』

両腕をアニキの手に押さえ付けられて動くことが出来ない。

『分かったと言え』

『嫌だ』

『言わないとキスをするぞ』

『！！』

アニキの顔が近づく。

『じよ、冗談だろ？アニキ』

『本気だ』

アニキは真っ直ぐに俺を見おろしている。

ま……間近で見ても美形だなアニキ。ってそんなことを考えている場合じゃない。

だんだんとアニキの顔が近付いてくる。

『……………どうする？』

口元にアニキの息がかかった。

その瞬間、俺は負けた。

『わ………わかった！！分かったからアニキ！！頼むからやめてくれ！！！！』

アニキはゆっくり顔を上げると、目を細めて笑った。

「約束だぞ……」

俺はアニキが部屋から出て行くまで、動くことが出来なかった。

思い出したくなかった……。

これも突っ込んで聞かれなくなかった。あんまりどころか口かさけても言いたくない。

「柳ヶ瀬……」

「おう」

「どうしても聞きたいなら教えてやる。そのかわり聞いたあと俺とお前は他人な」

俺は全開の笑顔で言った。

柳ヶ瀬の動きが止まる。そしてゆっくりと口を開いた。

「……聞かれたくないんだな？」

俺は笑顔で頷く。

「分かった、悪かった。二度と聞かないからその顔はやめてくれ。」

「……気色悪い」

失礼な。相変わらず口が悪いぞ柳ヶ瀬。

「用はないぞ」

「は？」

学校からの帰り道、俺はアニキに何か用があったのか聞いてみた。その答えがこれだ。

「なんで俺のクラスまで来たんだよ……」

「昼休みに真橋が1年の教室に行くとかクラスの奴に言っているのが聞こえてな。もしかするとお前の所かもしれないと思った。」

アニキ、真橋さんと同じクラスだっけ。話しかけるなって言ってたけど無理なんじゃないか？

「真橋がイサに何をするつもりなのか心配になってな」

……心配して捜しに来てくれたのかアニキ。

「すぐに真橋を追い掛けたんだが、途中教師に捕まった」

ポンツとアニキが俺の頭の上に手をのせる。

「悪かったなイサ。嫌な思いをさせた」

「……別に嫌ことなんてされてない」

辛いのは真橋さんだ。アニキのことが本当に好きだったんだろう。だからアニキと一緒にいる俺にあたってしまったんじゃないだろうか。

アニキのオマケ扱いには少し参ったけど……。

俺が俯いていると、アニキは俺の頭に置いた手を髪にからめて掻きまわした。

「なっ…にするんだよ!!」

「真橋の言ったことは気にするな」

「別に気にしてなんかない!」

こんな嘘をついてもアニキにはすぐバレる。でも恥ずかしいだろ。高校生にもなってアニキに慰められるなんて。

「俺よりも真橋さんは大丈夫なのかよ」

「ああ、あの後屋上でずっと泣いていたみたいだな」

「だなんて……!!」

そんな他人事みたいに！

「後ろ」

アニキは前を向いたまま後ろを指差した。

……なんだ？後ろを見ろってことか？

「え………？」

真橋さんが仲良く腕を組んで歩いている。もちろん相手は男だ。

「なんで……？」

俺はそれを呆然として見つめた。

真橋さんは俺が見ていることに気付くと声を張り上げて隣の男に話し掛ける。

「ヤダ。見て、兄弟で帰ってる。恥ずかしいよね高校生にもなつて。ブラコンなんて見てて気持ち悪い。あっちから帰ろう」

真橋さんは隣にいる男の腕を引っ張って脇道へそれた。

角を曲がる瞬間、隣の男はちらりとアニキを見ると片手を上げて笑った。

真橋さんは気付かなかったようだ。そのまま二人の姿は見えなくなった。

「アニキ………誰？今の奴」

「真橋の新しい彼氏……だろう」

「な、なんで！？真橋さんアニキのことが好きだったんじゃないの

か!？」

俺はアニキを問い詰める。

「さあ……。顔の良い奴なら誰でもいいんじゃないのか？」

「えええ……。でも何でさっきの今でもう付き合ってるんだよ!？」

アニキが何かしたんじゃないだろうな。

俺はアニキを疑いの目でじっと見つめる。

アニキは口元に手を当てるとゆっくり口を開いた。

「……オレを悪く言って屋上にいる真橋を慰めるとあの男に言っただけだ。6時限目は二人共教室に戻って来なかったな」

はあ　　!?　なんだそれは!!

「なんで自分の悪口なんか言わせるんだよ!!」

「真橋のような自信過剰の女は自分の気持ちに賛同してくれる奴になびく。自分を一番好きだからな」

……。　　そ、そうなのか？

「あの男は前から真橋を気に入っていた。口の上手い奴だから真橋もすぐになびいたようだな。まああまりいい噂のある奴ではないが」

「なんでそんな奴紹介するんだよ!」

「真橋も同じようなものだ。俺と付き合っている間も毎晩クラブ遊びをしていたからな」

真橋さんが? そんな風には見えないのに。

あれ? そういえば……。

「ア、アニキもクラブに行ってたのか!？」

「何を言っているんだ。毎晩オレは家に居ただろう」

そういえばそうだな……。

俺は少し胸を撫で下ろした。

しかしアニキはそれを知っていて付き合ったんだな。本当に誰でも良かったのか……?

俺は我知らずため息をおとす。

アニキは労をせずして真橋さんを自分から遠ざけたのか。あの男に真橋さん押し付けて。

「

……」

こんなにも簡単に人を動かせるものなのか？ いや、アニキだからか。

…恐ろしい。

普段俺も気付かない内にアニキに躍らされているんじゃないだろうか。

台所にて。
(前書き)

第3話の後半が変わっています。すみません。

台所にて。

「お兄ちゃん、あたし怖い」

「大丈夫だ愛佳。俺が守つてやるから」

「お兄ちゃん……………。うん、あたしがんばる。えいつ!」

「あつ…………」

「お、お兄ちゃん!大丈夫!」

パンツ。

手を鳴らす音が台所に響く。

俺と愛佳が振り向くと、後ろにアニキが立っていた。

「ストップ。おまえ達何をやっているんだ」

俺と愛佳は目を見合わせる。

「……………り、料理だよな、愛佳」

「そ、そうよ。見れば分かるでしょ? コロッケを揚げてるのよ。今、冷凍コロッケを油に入れたところ」

「入れた…………ね。オレには投げたようにしか見えなかったがな」
アニキが愛佳をにらむ。

「…………な、投げたらダメだったかな? お兄ちゃん」

小さな声で愛佳が俺にささやく。

「…………だ、ダメだったみたいだな」

愛佳が料理するのを嫌がるアニキを俺は何とか説得に成功した。しかし…………。

料理初心者の俺たちにとって、冷凍コロッケといえど揚げものは難

題だったようだ。

「イサ、直ぐにヤケドした所を流水で冷やせ。」

「り、流水？」

「……水道の水を流しっぱなしにしろ」
なるほど。流れる水のことか。

「愛佳はヤケドの薬を持って来い」

「薬箱どこ？」

「……リビングにあるクローゼットの棚の右上」

バタバタと愛佳がリビングへと向かう。

アニキは箸でコロッケをひっくり返すと腕を流水で冷やしている俺の隣に立った。

「大丈夫か？」

アニキが心配そうに俺の腕を見る。

「全然大丈夫。少ししか油からなかったし」

「そうか」

「お兄ちゃん、薬持ってきたよ」

愛佳が急いで戻って来る。

アニキは愛佳の持つている救急箱を奪い取った。

「何するのよ翔良！！」

そして救急箱を開ける。

「ヤケドの薬、どれだか分かるのか？」

「………わ、分かるわよ！えっと………これ！」

愛佳は緑の箱を取って差し出す。

「それは飲み薬。ヤケドは塗り薬だ」

「んーと………じゃあこれ！！」

じゃあって、クイズになってるぞ愛佳。

「………これ塗るか？イサ」

「なんの薬なんだ？」

「親父の痔の薬だ」

愛佳がポトツと薬を落とす。

「え、遠慮しとく……」

親父……痔もちだったのか。

「お兄ちゃん、ヤケド痛くない？大丈夫？」

愛佳が不安そうにたずねる。

「大丈夫だよ。薬も塗ったし、全然痛くないよ」

「よかった。……ごめんね、お兄ちゃん。あたしもう料理しない」

俺がヤケドをしたせいでどうやらとても落ち込んでしまったようだ。

「愛佳……」

「その方がいいな。愛佳は料理に向いてない」

アニキがご飯の準備をしながら言う。

コロッケもキレイに揚がったようだ。

「……………」

悔しそうに愛佳が俯く。いつものように言い返すことも出来ないようだ。

「……愛佳、そんなことないよ。やったことがないから出来ないだ

けで、料理だつてきつとやれば出来るようになるよ」

「お兄ちゃん……」

「そうだ、アニキが愛佳に料理を教えたらどうか？アニキ料理上手いし」

俺がそう言つと二人の動作が止まつた。

「……冷凍コロッケもまともに揚げることの出来ない奴に教える料理などない」

「あたしだつてあんたに教えてもらつてまで作りたい料理なんかないわよ！！どんな授業料を要求されるかわかったものじゃないわ！！いーもん、お母さんが旅行から帰つてきたら教えてもらうもの！！」

「そうすることだな。せいぜい母親にはヤケドさせないようにしろよ」

「……」

アニキは冷たい顔をして愛佳を見る。愛佳は真っ赤になつて言った。

「……あたし、ご飯いらないから！」

愛佳は階段を駆け登り、自分の部屋へと戻る。

「アニキ……」

俺はアニキを睨んだ。

「今のは言い過ぎだろ！何でそんなに愛佳に冷たいんだよ！！料理くらい教えてやってもいいだろ！？」

「……」

アニキは俺の手を取ると腕にある小さなヤケドの跡を見た。

「……あいつはお前にヤケドをさせた。もう二度とお前とは料理させない」

「アニキ、俺が勝手に手伝つたんだよ。愛佳のせいじゃない」

「………そんなにあいつを庇うな」

え？

アニキは俺の手を離すとご飯の準備を再開した。

「イサ、あと少しで出来る。座っている」

「わかった……」

アニキ………？

アニキがなんだか切なそうに見えるのは、俺の気のせいだろうか……。
……。

愛佳と俺

コンッ

愛佳の部屋のドアを軽く鳴らす。

「愛佳、開けていいか？」

そう問い掛けるとドアが内側からゆっくりと開いた。

「お兄ちゃん……」

どうやら泣いていたようだ。大きな瞳が潤んで赤くなっている。

「……愛佳。これ、熱いから気をつけて食べて」

ポンッと愛佳の手に、持っていたものを渡す。

「カップラーメン？」

「……うん、ごめん。これしか料理できない」

「あははっ」

愛佳が涙目で笑う。

「これ、料理って言わないよお兄ちゃん」

「そうかな」

少しは元気出たみたいだ。……よかった。愛佳は笑っているほうがいい。

「ごちそうさまでした」

愛佳はカップラーメンを食べ終わると、椅子から降りて地べたにいる俺の隣に座った。

「お兄ちゃん、ヤケドさせちゃって、ほんとにごめんね」

愛佳は目を下に落として悲しそうな顔をする。

……そんなに落ち込まなくていいのに。

ヤケドは全然たいしたことないし、もしも痕になってたとしても男だから気にならない。

それよりも、こんなに元気のない愛佳を見るのは辛かった。

「愛佳、謝られるよりもありがとうって言うてもらうほうが俺は嬉しい」

愛佳が隣にいる俺を見る。

「ありがとう？」

「そう、たとえば……、油から庇ってくれてありがとうお兄さま……とか」

愛佳の大きな瞳がますます大きくなる。

……うう。言ってて恥ずかしくなってきた。

「あ、いや、あの……」

冗談だと言おうとした瞬間愛佳が口を開いた。

「うんっ、庇ってくれてありがとうお兄さま。……大好きっ!!」

愛佳が全開の笑顔で笑う。

「……………」

今度は俺が大きく目を開く番だった。

……なんて、可愛く笑うんだろう。

俺は顔全体が赤くなった。

「だ、大好きって……」

「うん、大好き。お兄ちゃんはおたしのこと好きじゃないの？」

「え……っ。い、いや……だ、大好きだよ」

俺は焦りながらもそう言った。愛佳が嬉しそうに笑う。

言って良かった。元気が出たみたいだ。

……しかし、恥ずかしい。大好きなんて言葉、ここ数年誰にも言ったことないぞ。でも、言われるとかなり嬉しいものなんだな。しか

もこんなに可愛い義妹から。少し……いや、けっこうドキドキしたぞ。

「お兄ちゃん、あたしやつぱりお母さんから料理教えてもらう！だからお兄ちゃん、上手になったらあたしの手料理食べてね」

「うん、楽しみにしてる」

愛佳と目を合わせて笑い合う。

愛佳はもういつもの明るい表情に戻っていた。

俺は愛佳のこういう素直なところに關心する。

……アニキと正反对だからだろうか。

本当に可愛いよな。義妹になったのが愛佳でよかった。

「お兄ちゃん。あたしね、翔良より料理上手になって絶対に見返してやるんだ」

愛佳はぎゅっとこぶしを握りこむ。

「……………」

愛佳、もしかして俺がヤケドをしたことより、アニキに言い負かされたことで泣いていたのか？……悔し泣きか？

俺は笑ってため息をつく。

まあいいか、そのほうが愛佳らしい。この調子だと本当に料理が上手くなりそうだな。楽しみだ。

俺と柳ヶ瀬

「郡山、なんかあったのか？今日はやけに嬉しそうだな」

「そ、そうか？」

放課後の教室で、俺はアニキを待っていた。柳ヶ瀬も一緒に残って付き合ってくれていた。

……俺、そんなに嬉しそうな顔してたのか？

今日は新婚旅行から親父達が帰ってくる日だった。

確かに嬉しいかもしれない。親父に会えることがじゃなく、これでやっとアニキと愛佳の言い争いに俺だけが巻き込まれる回数が減る。

これからは親父たちもあの二人を仲裁をしてくれることだろう。……たぶん。

「親父たちが旅行から帰ってくるんだよ。お土産が楽しみだ」

「そうか、お前ん家再婚したんだったな。そういえば義妹可愛いんだろ？今度紹介してくれよ」

「……絶対いや」

俺が冷たく言うのと柳ヶ瀬がむくれる。

「なんだよケチ。このシスコン」

……うわ。ムカツク。こんな口の悪い奴を愛佳に紹介して愛佳の心が傷付けられたらどうする。心配で合わせられない。それよりも心配なのは俺がいつまで柳ヶ瀬と友達でいられるかだが。

「……イサ」

低い声が響く。すると、クラスの女子ならず男子までもがドアの方を振り向いた。

……もう毎日こんな状態だ。いい加減なれろ、お前ら。って、柳ヶ瀬。お前も見とれるな。

「相変わらず、すっげえ存在感だな。お前のアニキ」
ボソッと柳ヶ瀬が感想をもらす。

………そんな感想いらない。

もう少し労ってくれる友人が欲しい。こんなアニキを持つ俺の身にもなってくれ。平安な人生はまず望めない。………うう、自分は普通すぎるほど普通なのに。

そもそも何で柳ヶ瀬と友達になっただんだけ。

アニキとの帰り道、俺はそんなことを考えていた。

俺が中学校に入学した時、学校中でアニキの顔が知れ渡っていたせいで、俺はクラスの奴に遠巻きにされていた。どうもアニキの弟ということで近寄りがたかったようだ。

そんな時だった。柳ヶ瀬が俺に話し掛けてきたのは。

「おい、郡山。お前のアニキ今日初めてみたよ。すっげーカッコイイのな!!」

興奮したように柳ヶ瀬は語る。

「……そんなことないよ」

俺は目を逸らして答えた。

「そんなことないわけあるか!」

柳ヶ瀬は俺の頭をペシツとはたく。

な、なんだ? なんではたかれるんだ!?

「あんだだけの美形のアニキをそんな風にいうな。謙遜どころかかえって嫌味だ。ボケ」

……ボケって。

ム力つかなかったと言えば嘘になる。でもそんな風に俺に接する奴は初めてだった。

それ以来柳ヶ瀬は俺に話し掛けるようになり、俺も柳ヶ瀬に話し掛けるようになった。

そしていまだに付き合いは続いている。

「……俺はマゾか?」

「は?」

アニキが変な顔をする。

うわ、俺いま声に出してたのか!?

「い、いや。何でもない。独り言」

俺は慌てて顔の前で手を振った。

俺はマゾなわけじゃない。柳ヶ瀬が誰とも分け隔てなく接し

てくれたのが嬉しかったただけだ。

そうだな、そういうことにしておこう。

俺は首を縦に何度か振る。

「イサ……。一人芝居か？」

「えっ……！」

独り言の上に動作まで付けた俺が不気味だったようだ。アニキが俺から一歩遠ざかる。

おお、アニキに避けられるなんて新鮮だな。

……って、違う……！ホントにマゾなのか俺！？いや、いつもアニキにはくつつかれてるからそう思ったただけだ……！！

俺は何とか自分で自分を説得し、意識を逸らそうとアニキに話し掛けた。

「親父たち、今日帰ってくるんだよな。もう帰ってるかな？」

「そうだな、昼頃に飛行機が到着すると言っていたからな。もう家にいるんじゃないのか」

「そっか。じゃあ愛佳、きっと喜んでるな。久しぶりに母親に会えて」

「そうだな。ガキだからな」

……………。

どうやら話す話題を間違えたようだ。

「ええと、今日の夕飯何かな。久しぶりに義母さんが作ってくれるのかな？」

こないだも夕飯の話題で話を変えたような気がするけど、まあいいか。

「いや、旅行から帰って来たばかりで疲れているだろう。オレが作るさ」

「そっか」

…… アニキ、義母さんには優しいのに、なんで愛佳にはこんなに冷たいんだ？再婚が気に入らなかった訳ではなさそうだ。そうだとしたら義母さんにも冷たいはずだ。

「イサ、雨が降りそうだ。早く帰るぞ」

考えごとをして歩みが遅くなっていたようだ。俺の肩を少し押すようにして、アニキが早足で歩き出す。

「雨？」

顔をあげて空を仰ぎ見ると、灰色の雲が広がっていた。

外国とトラウマ

アニキの言った通り、家に着いて暫くすると雨音が鳴り出した。

俺はリビングのソファから窓の外をちらりと見た。

……だんだん外が暗くなってきた。そのうちカミナリが鳴るんじゃないだろうか。

コの字のソファの左側に座っていた俺は、さっきまで見ていた斜め前に座っている愛佳に目を戻した。

親父と義母に囲まれている愛佳は、声を上げて泣いていた。

……………どうしたらいいんだろう。

向かいに座るアニキを見ると、何を考えているのか判らない無表情な顔でずっと窓の外を見つめていた。

「やだ、やだ、やだあ。あたし行かない。外国なんて行かない！！ここに残るのぉ！！」

首を激しく振りながら愛佳が叫ぶ。

もう一時間ほど泣いているんじゃないだろうか。愛佳の目は真っ赤になって、もう目の回りがはれてきそうだった。

ことの起こりは親父の爆弾発言からだった。

「俺は今回の旅行で決めた。アメリカで仕事をする」

親父達は新婚旅行にアメリカへ行った。けどそれが仕事の転勤の下見も兼ねていたとは、親父達が帰ってきてから初めて聞かされた。義母さんだけは知っていたらしいけど。

「会社の研究所がとても素晴らしい。最先端の機械が揃っていて、今の会社とは比べものにならない」

旅行から帰ってきた親父は、興奮したように語った。

親父は大手の会社の研究所員だ。

腕を見込まれて、アメリカにある本社の研究所から誘いの声がかかったのだそうだ。

再婚したばかりだったこともあるのだろう。親父は話を断ろうとしたらしいが、義母さんは違う所へ行くはずだった旅行先をアメリカへと変更し、会社を見てからと親父に薦めたのだった。本当に親父にはもったいないくらいの出来たお嫁さんだ。

そして愛佳も一緒に連れていくという話になり、愛佳が泣き出したのだった。

「愛佳。男の子二人だけのお家にあなただを置いていくことは出来ないのよ?」

義母さんは愛佳を一生懸命に諭そうとする。

「なんで? 昨日まではそうだったじゃない!! お母さん達居なくても、あたしちゃんとここで生活してたじゃない!!」

だが、愛佳は一向に引こうとしない。

「数日と数年は違うでしょう!? 今度はいつ帰ってくるか判らないのよ!?!」

「でも、どうしてあたしだけ行くの!? お兄ちゃんも一緒にじゃダメなの!?!」

愛佳は縋り付くような目で俺を見る。

「……うつつ、そんな目で見られても辛い。だって、俺はどうしたって行けない。」

「愛佳、勇雄さんを困らせるんじゃないの」

義母さんが愛佳をたしなめる。それでも愛佳は俺を見ることをやめなかった。

「愛佳……」

どうしよう。この際どうにかして俺も外国に行くべきなのだろうか。」

いや、無理だ。

……絶対。

愛佳の視線が痛くて目を伏せる。……やばい。少し息が浅くなってきた。

「義母さん。夕飯に使う材料が足りないので、買い出しに行ってもいいでしょうか？」

アニキはそう言っているとソファから立ち上がった。

「え、ええ。雨が降ってるから気をつけてね」

「はい。」

アニキは、ドア迄歩くと振り返った。

「イサ、お前もこい」

俺は急いで立ち上がった。

「うん！」

玄関を出て傘をさす。

俺は大きく息を吸った。

アニキがああの部屋から連れ出してくれてよかった。また親父やアニキに心配させるところだった。

俺は昔から……

いや、あの時から、外国というキーワードに弱い。もう、トラウマになってしまっているのだろう。その時のことを思い出すだけで過呼吸になってしまう。

……うん、大丈夫。だいぶ呼吸も楽になった。

アニキは玄関を閉めた後、一步も歩かない俺に黙って付き合ってく

れていた。

俺は振り返ってアニキを見た。

「アニキ、スーパでいいんだよな」

そう言っ俺は雨の降る中を歩きだす。

「ああ」

アニキが後ろからついてくる。

雨のせいか、人影は少なかった。その道のりを、俺とアニキはゆっくりと歩いた。

雨は時間が立つごとに酷くなった。

俺とアニキが買い物を終えて家に着いた頃には、カミナリが鳴りだしていた。

リビングへ入ると義母さんは疲れた顔をしてソファに座り込んでいた。愛佳はまた2階の自分の部屋に閉じこもっているようだ。

帰るなり、台所に向かっていたアニキに問い掛けた。

「……アニキ。俺、夕飯愛佳の部屋で食べていいかな？」

いつもは俺と愛佳が二人きりになるのを嫌がるアニキも、今日は頷いてくれた。

「少し待つてろ。すぐに出来る」

「お、重い……」

お盆に乗せた二人分のご飯は量が多かった。階段を昇るのが大変な程に。

「愛佳の好きそうなものが多いよな……」

お盆にはハンバーグやルーから作ったシチュー、サラダやいつもは付かないデザートまで並んでいる。ちなみに愛佳は洋食や甘いものが好みだったはずだ。

仲が悪そうに見えても、ちゃんと愛佳のことをアニキも気にしているんだ。

そう思うと、俺は少し嬉しくなった。

愛佳の部屋の前に立って、お盆を下に置いた。

そしてドアをノックしようとした瞬間、カミナリが鳴った。

「きゃあっ!」

部屋の中から愛佳の声が聞こえた。

「愛佳!?!」

俺はすぐに部屋のドアを開けた。

愛佳は布団を被ってくるまっていた。

もう一度カミナリがなると、ビクツとふるえる。

……カミナリが怖いのか?

愛佳は俺に気付かないようだった。俺は愛佳にそっと近付いた。

「愛佳」

声が聞こえたのだろう。愛佳は布団をバツと押し退けると、大きな目で俺を見た。

「お兄ちゃあん!」

愛佳はベットの上で膝をついたまま、俺に抱きついた。

……震えてる。ホントにカミナリが怖いんだ。

俺は少し緊張しながら愛佳を抱きしめた。

「大丈夫だよ。怖くない。大丈夫」

愛佳は一瞬ピクツと肩を動かした後、ぎゅっと俺にしがみついていた。少しすると震えは止まったようだった。

しかし、抱きしめた手を離してみても、愛佳は俺に抱きついたままだった。

「愛佳？」

そう呼ぶと首を左右に振って離れるのを拒否した。

………どうしたらいいんだろう。なんかすっごいドキドキしてきた！！自慢じゃないけど女の子抱きしめたのなんか初めてだし！！

俺が内心慌てっていると、後ろから腰を強く引っ張られた。

背中が壁にあたる。壁というより、これは人だろう。

顔を後ろに向けると不機嫌なアニキの顔があった。

「ア、アニキ？」

なんか怖いんですけど……。つか、苦しいんですけど。

アニキの両腕は俺の腰を強く締め付けていた。

「………なによ翔良。人の部屋に勝手に入ってこないでよ」

「………お茶だ」

床を見ると確かにお盆に乗ったお茶が置いてある。………コップから零れてるけど。

愛佳はアニキを睨んで言った。

「……お兄ちゃんから離れなさいよ」
「嫌だね」

「……っ。離れてよ！！さわらないでよ！！なんで！？なん
でよ！？」

「あ、愛佳！？」

愛佳の声が叫び声のようになった。大きな瞳からは涙が零れる。

「なんであたしだけ行かなきゃいけないの？いやだよ。あたしここに
いたいよ！」

「愛佳……」

愛佳は涙を拭かないままに俺を見る。

「お兄ちゃん……。あたし好きな人がいるの。そばにいたい。だ
から、ここを離れたくない」

「……………」

愛佳に好きな奴がいる。それは初めて知ったことだった。でも、そ
れよりも……………」

布団を被ったせいで少し跳びはねた長い髪や強い瞳、真っ直ぐに俺
をみる視線。それがすごく大人びて見えて……………驚いた。

「アニキ……。離して」

俺の声は少しかすれていた。

「イサ……」

アニキが腕を離すと、俺はすぐに愛佳の部屋を出た。

早足で自分の部屋に入ると、後ろからアニキが追い掛けて入ってき
た。

「なんだよ、くるなよ……………」

「イサ……。泣くな」

……………バレていたのか。泣き顔を見られなくて逃げたのに。

「イサ……」

アニキは俺の前に来ると、手を延ばして俺の頭を胸に押し付けた。

なんだよ、もう。最近アニキに抱きしめられてばかりだな。俺は女じゃないんだぞ。

そう思ったけど、なんだかアニキの胸の心音が心地良くてそのままでいた。

外国に行けない自分も、親父達を説得するすべを持たない自分も嫌だった。愛佳が悲しんでいるのに、なにも出来ない自分が悔しかった。

「……俺、義母さんが愛佳を連れて行きたいって、その気持ち分かるんだ。でも、愛佳が泣いてるのに、ここにいたいって言ってるのに……。どうにかしてやりたいのに……」

せめて俺が外国に行けたなら、少しは愛佳も寂しさが紛れたかもしれない。

好きな奴と離れる辛さも、慰めることが出来たかもしれないのに。

「……泣くな」

アニキが指で俺の涙をぬぐう。

そしていつそう強く腕に抱き込まれた。

「愛佳のことは俺が何とかしてやる。だから泣くな」

「アニキ……？」

アニキが愛佳のために動いてくれるのか？愛佳と仲が悪いのに？本当に？…………いや、でもアニキならなんとかしてくれるのかもしれない。元彼女の真橋さんを軽く追い払ったアニキなら……。

そう考えて安心したせいなのか、アニキの心音を聞いて落ちついたせいなのか。俺はアニキの腕の中でゆっくりと眠りに落ちていった。

嫌な夢を見た。

昔の夢。

俺は小学生だった。

お袋がまだ一緒だった頃の夢……………。

周りに見える景色は遠い国のもの。

日本ではないどこか。

まだ幼い俺は、国名も知らなかった。

天高くそびえ立つアパートやお城のような建物が、俺に日本ではないことを感じさせていた。

昔、お袋はこの国で一時期モデルの仕事をしていたらしい。

日本人離れたスタイルや顔に加え、外国では珍しい黒髪が受け、なかなか有名だったのだそうだ。

この国へ来たのは、お袋がモデル時代の知り合いの結婚式に招待されたからだ。

俺もアニキも夏休みだったから、仕事で都合の付かない親父を置いて、三人で旅行も兼ねてこの国へ来たのだった。

披露宴には俺もアニキも出席した。

大きなレストランを貸し切った華やかな会場。でも外国人ばかりで、何を話しているのかさっぱり分からなかった。だから俺は、大人達の目を盗んで会場の外へと脱出したのだ。

「イサ!!」

俺が外へ出たのに気付いたアニキが、俺を追いかけてくる。少し怒っているようだ。

この頃のアニキはまだ中学に入っただけだったけど、既に大人のような分別を持ち合わせていた。

「外国は危ないんだ。一人で歩き回るな」

「だってヒマなんだよ。みんなに言ってるのか、ぜんぜん分かんないし」

「……早く戻らないとお袋が心配する。もし抜け出したのがバレたら、怒ってイサが楽しみにしていた海へ連れてってくれなくなるかもしれないぞ」

「……いやだ」

俺は泣きそうになった。

「じゃあ早く戻ろう。今ならトイレに行ってたことにしてごまかしてやるから」

そう言っただけでアニキは手を差し延べた。

俺は頷いてその手を取った。

……いや、取ろうと……した。

誰かの足音に気付いたアニキは、少し後ろを振り帰ると差し延べた手を勢いよく伸ばし俺に覆い被さった。

その瞬間、大きな音が鳴り響いた。

「え……?」

何が起こったのか分からなかった。

アニキの体が影になって、何も見えなかった。
崩れ落ちるアニキ。

そして、クリアになる視界。
その視線の先には……

少し離れた場所に、知らない男の人が立っていた。

その手に握られているのは拳銃。

銃声を聞いた教会の中の人たちが、慌てて飛び出してくる。

「いやぁー！！翔良！！」

お袋の叫ぶ声が聞こえる。

下に見えるのはアニキと赤く染まる地面。

……なにが、おこったんだろう。

どうしてアニキはたおれているんだろう。

どうしてこんなにも血がながれているんだろう。

『外国は危ないから』

……おれのせい？

おれが、かつてに外にでたから？

だから？

拳銃を持った男が狂ったように叫ぶ。

何を言っているのか、分からない。
知らない国の言葉。

回りの人が男を取り捕まえる。

アニキに駆け寄って名前を呼ぶお袋。

……覚えてるのは、そこまで。

目の前がぼやけて、そのあと視界が真っ白になった。

「……イ……サ……」

意識が無くなる前に、アニキの声が聞こえた気がした。

「アニキ!!」

叫んで、目が醒めた。

胸に、手をあてる。

心臓が、早い。

「……もう、見ないかと思ったのに」

夢ではない、現実起こったこと。

犯人はお袋の不倫相手だった。

親父から後で聞いたのは、お袋が親父と出会う前に付き合っていた男性だったということ。

親父と付き合うことになり、お袋とその男は別れたが、いつの間にかよりを戻していたらしい。

年に数回のお袋の旅行の意味を、その時初めて知った。

お袋が愛人にもらした一言が原因で、男は犯行に及んだと自供した。

『子供さえいなければ、夫を捨ててこの国で暮らすのに』
そう、お袋が言ったのだと……。

男は刑務所に収容され、俺達家族の仲はバラバラになった。

幸いアニキの撃たれた場所は肩の神経からは少しそれた所で、後遺症は残らず早期に回復した。

でも、家族の仲が回復することはなかった。

親父は子供には母親が必要だと考えたのか、離婚する気はなかったようだが、お袋が耐えられなかったらしい。

この一件のあと、頻繁に不倫を繰り返すようになり、俺が中学へ上がるのを見届けた後、愛人の内の一人と駆け落ちした。

その日はとても晴れていて、穏やかな雲が流れていた。入学してすぐの学校からの帰り道、川添いの桜並木が綺麗で、花の好きなお袋に教えようと早足に歩いて帰ったのを覚えている。

家に帰るとお袋の姿はなく、テーブルの上には一枚の紙切れがあった。

お袋の名前の入った離婚届け。ただ、それだけ。

メモの一言もなかった。

全部が俺のせいのように思えた。

外国は危ないのに、俺が勝手に外へ出たから。
だから、アニキが怪我をしたんだ。
だから、家族の仲がおかしくなったんだ。
だから、お袋が家を出ていつてしまったんだ。

お袋が家を出て、俺は少しおかしくなってしまったのかもしれない。
外国の風景がテレビに映るだけで、呼吸が出来なくなった。
喉の奥に膜ができたかのように、息が出来ない。

心配したアニキと親父が病院へ連れて行ってくれた。
精神的なもので、外国を見ると嫌なコトが思い出されて過呼吸になるらしい。

夜中に夢をみて、飛び起きることもあった。そう、今のうちに。

「……………汗、気持ち悪い」

ベットから降りて袖口で首を拭う。

そこで昨日の洋服のまま寝てしまったことに気付いた。

「あのまま寝ちゃったんだ……………」

シャワーを浴びようと部屋のドアを開ける。

すると、ドアのすぐ横の壁にアニキがもたれかかっているのに気付いた。

「……………なに？アニキ」

「……………いや、なんでもない」

俺をひと見すると、そのまま無言で階段を降り始めた。

……俺の叫んだ声が聞こえたんだろうか。

俺もアニキの後を追って階段を降りだす。

愛佳のことがあって、外国のことを考えたせいか、久しぶりにあの夢を見た。

背中には汗で洋服が張り付いている。

こんなじゃ、外国に行くことは出来ない。

だけど、愛佳が悲しんでいるのをそのまま見ているのは嫌だった。

親父達は俺が何を言っても納得しないだろう。納得させられるだけのものを、持っていないから。

でも、アニキになら……。

力が欲しいと思った。

アニキに頼るしかない自分。

そんな自分を恥ずかしく思った。

階段上で立ち止まり、先に行くアニキを見下ろす。

階段を降りるアニキの背中が、心なしかいつもより大きく見えた。

外国とトラウマ 2 (後書き)

「教会」ではなく、「会場」です。途中間違ってます。すみません。

アニキと俺

「ふう、スッキリした」

シャワーを浴びたあと、タオルで髪をふきながらリビングへと戻る。すると、俺以外の家族全員が集まってソファーに座っているのを見た。

あれ？今日は日曜だよな……。

仕事休みになる日曜日は、いつも遅くまで寝ている親父までいる。

……もしかして。

これはあれだろうか。

昨日のアニキの「俺がなんとかする」発言。
だとすると、行動が早いよなあ…アニキ。

そう思いながらソファーへと近付いた。

アニキが俺に気付いて、目で隣に座るように促す。俺はそこに腰を降ろした。

「さて……」

親父がまだ寝足りない顔でまぶたを擦る。

「愛佳ちゃん、みんな揃ったよ。全員に聞いて欲しい話って何なのかな？」

どうやら愛佳がみんなを集めたらしい。

てつきりアニキが話しをするために集めたんだと思ったけど、どうやら違うようだ。

愛佳は膝上で手をぎゅっと握りしめると、決意したように言った。
「……………ごめんなさい。あたし、外国には行けません」

「愛佳……………！あなたまだ何を言って……………！」

義母さんがそう言っただけで立ち上がろうとするのを隣にいる親父が止める。

そして親父は愛佳に顔を向けた。

「行かない……………ではなく、行けない……………か。」

愛佳ちゃん。外国に行きたくない、何か理由があるんだね？」

愛佳は強くうなずく。

そしてまっすぐ前を見て言った。

「……………義父さん、お母さん。あたし、好きな人がいます」

「愛佳、あなたそんな理由で……………！！」

「いいから、愛佳ちゃんの話聞きなさい。な？」

またも話し出した義母さんをやさしく親父が止める。

俺は、親父の人の話を最後まで聞くことのできる部分を尊敬していたりする。結構簡単そうではなかったからだ。

「あたし……………いまここから離れたら絶対後悔する。だって好き人のそばにいたい。離れるなんて嫌。その人に会えなくなるなんて嫌なの。今ここを離れたら、自分が駄目になる。きっと、何もしなかった自分が嫌いになる……………！！だから、ごめんなさい。一緒には行けません……！」

膝に頭をつけて深くお辞儀をする。

親父は困ったようにこめかみをかいた。

「好きな人……………か。そうか、そうなのか……………。ええと、どうするべきかな……………」

今度はさつきとは逆に、義母さんが親父の膝上に手をかざして止めた。

「愛佳、それは初恋？」

真剣な顔をして尋ねる義母さんに愛佳は頷く。

「……初めて、こんな気持ちになったの。その人から目が離せなくて、その人が笑うと嬉しくて……でもほかの人と話してるのみるとなんか苦しいの」

胸に手をあてて、まぶたを伏せる。

薄くあいた瞳に長い睫毛が被さって、瞳の奥が見えなくなった。

「こんな気持ちをくれるのはその人だけなの。」

お母さんたちと離れるのは寂しいよ。だけど、今はこの気持ちを大切にしたいの……」

愛佳と義母さんは瞬きもせずにお互いを見る。

義母さんはふと視線を外すと、ため息をついて笑った。

「そう、もうそんな年頃なのね。まだ子供だと思ってたけど……」

義母さんは立ち上がった。

「お母さん、愛佳の好きな人分かったちゃった。そう、だからそんなにここにいたいね……」

「えっ！！わ、わかったの！？」

愛佳が恥ずかしそうにうつらえる。

ふふ、と寂しそうに笑うと、義母さんはアニキと俺を見て、深く頭を下げた。

「愛佳はここへ置いていきます。愛佳を、よろしくお願いします。」

アニキが隣で頷くのが見えた。

「はい。何事も起こらないようにしますから、安心してください。な、イサ」

アニキに話を振られて慌て俺も頭を上下に何度か動かした。

「は、はい！大丈夫です！！」

そんな俺の姿が可笑しかったのか、今度は明るく微笑んだ。

「ホントはあたしもここへ残りたいくらい인데……」

「お、おい……」

親父が目を剥いて慌てる。それはそうだろう、一人で外国に行くのは寂しすぎる。しかも新婚で。

そんな親父の姿にみんなが笑う中、愛佳は放心したように下を向いていた。

「愛佳………？」

俺が声を掛けると、ビクツとして顔をあげる。

そしてみるみるうちに顔が朱くなった。

「……………っ！！」

あたし、ここに居てもいいの！？外国にいかなくてもいいの！？」

「遅っ！！」

俺は思わずつつこんだ。

義母さんが微笑む。

「…………ええ、いいわよ」

愛佳は両手を高く上げると、大声で叫んだ。

「やっっ…………た

！！！！」

「…………うるさい」

アニキが親父達に聞こえないよう小声でボソツと言う。

まあ、たしかに耳が少し痛くなったけど。

ああ、でもよかった。本当に嬉しそうだ。愛佳の明るい顔が見られてよかった。

「じゃあ、この話は終わりね。朝ごはんにしましょう」

義母さんは台所へ向かう。

「俺はもう少し寝るわ……」

親父はそう言っていると、寝室へと戻った。

「お兄ちゃん！！あたし、ここにいていいんだって！日本に残れるんだって！！」

愛佳まだ興奮しているのか、顔が朱いままだ。

「よかったな」

「うんっ」

愛佳は深く頷くと、くるりと顔をアニキの方へ向けた。

「……………翔良、ありがと。あんたに言われなかったら、ちゃんと話そうなんて思わなかった」

「……………別に、お前のために言った訳じゃない」

？アニキが愛佳に何か言ったのか？

「アニキ……………何か言ったの？」

俺の質問にアニキが答える気がないのを見ると、愛佳が話し出した。
「今日の朝ね、翔良があたしの部屋に来てね……………」

『泣かず、喚かず、嘘をつかずに自分の気持ちを正直に伝える。真剣に言えば相手の心に届く。それでも駄目な場合はオレが援護してやる。だからきちんと話せ』

「そう、言ってね。みんなを集めてくれたの」

「……………」

ちよつとびっくりした。アニキのことだから、アニキが親父達を口で上手く丸め込むものだ、失礼なことを思っていた。

そつえばアニキは口は辛辣になることがあるけど、嘘はあまりつ

かないよな……。

「あ、じゃあ朝ドアの所にいたのって、俺のこと呼びにきたんだアニキ」

「……まあな」

でもなんで呼ばなかったんだ？

俺が汗をかいてたから、急がせないように言わなかったのか？

……たぶんそうだろう。アニキは俺にすごく甘い。

こんなに早く行動を起こしてくれたのも、愛佳のためじゃなく、俺が落ち込んでいたせいだろう。

いや、自惚れではなく。そうだと断言出来るくらいに、アニキはブラコンだった。

「イサ、貸しだからな」

アニキが俺の目をみてそう告げる。

やっぱり俺のためだったか……。

「オツケー、分かったよ。いつか必ず返す」

そう俺が言つと愛佳が少しむくれた。

「あたしの貸しなんだからあたしが返す！！お兄ちゃんが何かする必要ないよ！！」

「……だからお前の為に言つた訳じゃないと言っているだろう。というよりも、オレはむしろお前がここに残るのは不満だ」

アニキがそう言つと愛佳は顔を再び赤くした。今度は怒りで。

「っ！じゃああんたが外国に行きなさいよ！！ていうか、なんであんたは外国に行かないのよ！！」

「イサのいない所にオレが行くわけがないだろう」

さらりとアニキは爆弾発言をかました。

……なに言ってたアニキ。

俺がそう言ってたつこむ前に、愛佳がさらなる爆弾発言をした。

「　　っ、そうよね！あんたお兄ちゃんのこと好きだもんね！！
お兄ちゃんの寝込み襲ってキスするくらいだもの！！」

……え？

アニキが眉を寄せて愛佳を強くにらむ。

愛佳もアニキをにらみ返した。

……ちよっと、待って。今、何て言った？

キス……って、キスのことだよな。

アニキが、俺に？なんで？

「愛佳、なに冗談いって……………」

そう言っただけで笑おうとしたけど、笑えなかった。

アニキも愛佳も真剣な顔をしていたから。

だから、笑えなかった。

静まり返ったりビングの中、アニキがため息をついた。

そのため息に、俺の肩がビクツとなる。

「見られてたのか。……一生、バラすつもりはなかったんだがな」

……………何を？

「まあ、いい。……イサ。貸しは今返せ」

え……………？

隣に座るアニキの手が、俺の頭を引き寄せた。

瞬間、何が起こっているのか分からなかった。

愛佳の息を飲む音がきこえた。

アニキの整った顔がぼやけて見えなくなるくらいに近づけられて、唇に何かが触れる。

キス　　されているんだと気付いて、止めようとした。

「……アニキ、やめ……………」

口をあけるとアニキの舌が入ってきて、さらにキスが深くなる。舌を絡め取られて身体が震えた。

震えたのは怯えか、それとも……………。

唇が離れてアニキの手が頭から外れると、身体はそのままズルリとソファーに沈み込んだ。

頭が真っ白で、何も考えられない。

それでも力の入らない身体をなんとかソファーから起き上がらせて立ち上がる。

このままここにすることはできなかった。

アニキの顔も愛佳の顔も見たくなかった。

………見るのが怖かった。

俺は俯いたまま震える足を動かし、逃げるように部屋を飛び出した。

義母と俺

……夜が明ける。

まだ暗さは残っているけれど、だんだんと空が明るくなってきた。

窓の外をベットのの上に座って見ていた俺は、ため息をついてベットを降りた。

アニキが起きる前に学校へ行こう。

学校はまだ開いてないかもしれないけど、その時は公園にでも行けばいい。

とにかくアニキと顔を合わせたくなかった。

昨日は、一日中部屋で過ごした。体調が悪いと言って、義母さんも、愛佳も、……アニキも部屋に入れなかった。

一晩中考えたけど、訳が分からなかった。

『あんな、お兄ちゃんのこと好きだもんね』

好きって、なんだ？

家族としてなら俺もアニキのことが好きだ。尊敬してるし、いつも

助けてもらって感謝してる。

……でも、キスしたいなんて思わない。てか、思っわけない。だって、男同士だぞ。いや、その前に兄弟だぞ？

手で髪をくしゃりと掴んで掻き回した。

「あ、親父達について行きたくなってきた……」

いや、無理だけど。

外国、まだ怖いし。

「学校……行こ」

こんな気持ちのままアニキには会いたくない。会っても、どうすればいいか分からない。

同じ家にいるからいつまでも避けていられないのは分かっている。でも今は、一日でも、数時間だけでもいいから顔を合わせたくなかった。

着替えをすませて静かに階段を降りる。

リビングの前を通り過ぎると、ふいにリビングのドアが開いた。

「うわ……っ」

驚いて声をあげる。しかしまだ夜明け前だと思いだして手で口を覆った。

アニキかもしれない……そう思い、緊張しながら振り向いた。

「驚かせた？ごめんね」

そこには申し訳なさそうな顔で立つ義母がいた。

少し安心して、小さくため息をついた。

「いえ、こんな時間に誰かが起きてるなんて思わなかったから」
そう言って笑った俺に義母が話し掛ける。

「ちよっと、勇雄くんとお話したいんだけど、いいかな？」

まだアニキが起きてくるまでには時間があるだろう。そう思って頷いた。

「え……………」

驚いて口を開けた俺に、義母が少し笑って今話したことを繰り返した。

「だからね、来週から行くことになったの。アメリカ」

義母はヤカンを火にかけると、テーブルのイスに座っている俺と向かい合うように腰を下ろした。

「急な話よね。旦那の方は代わりの人がもう見つかったから、今のグループ研究から外れても大丈夫なんですって。でもあたしは違うじゃない？まだ新しい人も決まってるないし、今日会社に言わなきゃいけないくて、もう気が重くって」

義母は困ったように眉をよせた。

俺は驚いたまま義母を見つめた。いや、目線だけ向けていただけで、

本当はなにも見えていなかった。

……来週。そんなに早く。今の状態で？

親父たちがいなくなることを、今は心許なく感じる。前までは親父たちが外国に行ってしまっても、平気だと思っていた。無意識にアニキに頼り切っていたんだろう。アニキがいるから大丈夫だと思いこんでいた。

でも、今は……

コトン、という音がして顔を上げた。

「勇雄くん、どうぞ」

テーブルにコーヒートーストが置かれていた。義母が席を立っていたことにも気が付いていなかった。

「……いただきます」

そうは言ったものの、正直食欲が湧かなかった。昨日から何も食べていないせいか胃が受け付けようとしない。

「食べられない？お粥でも作ろっか。昨日食べてないものね」

「いえ、大丈夫です」

慌てて朝食を食べ始める。ゆっくりしているとアニキが起きてきてしまう。そう思って義母に話しかけた。

「あの、話って？」

「……………」

少しためらった後、小さく微笑んで口を開いた。

「ごめんなさいね。勇雄くんが大変な時に三人だけにさせてしまうね」

「……………え？」

俺が、大変？

何のことを言ってるんだろう？

「……………ごめん、聞いちゃったの。昨日、朝ごはん出来たときに呼

びにいったらね、その時に……」
昨日。

「……っ!」

なんの事が気付いて真っ赤になった。

「あ……あれっ、あれは……っ」

口がパクパク開くだけで何の言い訳もでてこない。

どうしよう。なんて言ったらいいんだろう。

でも自分自身さえなにも理解出来ていない状態で、何も言える訳がなかった。

「……あ、あのね。驚いたんだけどね。でも前から翔良さんの勇雄くんに対する態度って、兄弟にするよりも甘いなって思ってたのよね。まるで恋人にするみたいっていうか……。だから昨日聞いてしまった時、妙に納得しちゃったわ」

思わず食べた朝食を戻しそうになった。

甘いつて……。恋人にするみたいって……。そんな風に見えていたのか。

そういえば義母さんとこんなに長く話したの初めてじゃないか？その会話の内容がこれか。

俺は深くうなだれたまま顔を上げるのが嫌になった。

恥ずかしさと、この会話の中身に嫌気がさして。

「来週の出発はいきなり決まったの。おとついの夜、旦那の会社から電話があつてね。アメリカで急いで取り掛かりたい研究があるから、すぐに来て欲しいんですって。昨日、翔良さんと愛佳には話したんだけど……」

話がふと途切れたので、気になって顔を上げた。

義母さんはまっすぐに俺を見ていた。

「ごめんね。愛佳が馬鹿なことをして」

「……………」

愛佳が？何かしたっけ？

覚えがなくて首を傾げると、義母さんは少し口の端をあげて笑った。

「人の気持ちを勝手に他の人が言っではいけないわよね。その人が相手に伝える気持ちがないならなおさら……………そんなことも出来ない子に育ててしまったのね。あたし」

「えっと……………」

落ち込む義母にどう言ったらいいかわからなくて慌てていると、いきなりリビングのドアが開いた。

ギクリとしてドアの方へと振り向く。

視界に入ってきたアニキの姿に慌てて目を逸らす。アニキの目が一瞬揺れたように見えたけど、気のせいかもしれない。

「俺……………っ、もう行きます！！」

立ち上がると、義母さんに手を掴まれた。

驚いて見ると引き止めるようにして首を振る。そしてアニキに話し掛けた。

「翔良くん、愛佳を呼んできてくれるかな？」

アニキは頷くと二階へ戻って行った。

「あの……………」

手を掴まれていて逃げるできない。手を振り払う訳にもいかない。

「ごめん、英雄くん。愛佳にケジメを付けさせたいの」

「……………」

ケジメ？

どうして愛佳が？

義母さんの言っていることがよく分からない。それよりも今すぐに、ここから逃げたかった。でもあまりにも真剣な顔で腕を掴む義母さんを前に、俺はただアニキたちが降りてくるのを待つことしか出来なかった。

義母と愛佳

「……うわー、ねてないんじゃないか？愛佳」

アニキが愛佳を呼んでリビングに来た瞬間、そう思った。それほどひどい顔をしていたから。目の下がかなりやばい。

アニキはどうなんだろう？そう思っただけと見たけど普段と変わらなかった。もともとあまりアニキがひどい顔をしているのを見たことがない。寝ても寝なくても顔はいつも通りだ。顔の皮が厚いのだろうか？

そんなことを考えた後、すぐに視線を下に落とした。

二人と目を合わせにくい。……いや、義母さんもあわせて三人だ。

昨日のあれを知られたんだと思うと、なんだかもう恥ずかしくて逃げ出したい。

そもそも義母さんが愛佳につけさせたいケジメってなんなんだ？

「おはよう、二人とも。そこに立ってないではやく座って」

義母さんがそう急かすと、アニキも愛佳も無言でイスに腰を掛けた。………気まずい。アニキが隣に座るのはいつものことなのに、体が緊張のせいが強張る。

「さて、二人の朝ごはんは話が終わった後でね。」

みんなが座って落ち着くを見ると、義母さんが手をテーブルの上で組んで話した。

「翔良くんごめんなさい。昨日、聞くつもりはなかったんだけど聞いてしまったの。………やっぱり、無理矢理するのはよくないわ」グツとのどがむせた。

叱るところはそこなのか？無理矢理じゃなかったらいいのか？兄弟

なんだけど……。

「ああ、聞いてしまいましたか。ええ、そうですね。すみません」
アニキが平然と答える。

………なんでそんなに冷静でいられるんだアニキ。隣にいる俺の方がいたたまれない気持ちになった。

「親父は気が付いていましたか？もし知らないなら、黙っていてもええとありがたいのですが」

「大丈夫。旦那は気付いてないわ。もちろん言わないわよ。旦那が知ったら倒れてしまうわ」

それはそうだろう。俺も倒れたいくらいだった。

しかしなんでこの二人は普通のことみたいに話してるんだ？俺は貧血を起こしそうなほど会話の内容がづらいんだけど。はやく話を終わらせてくれないだろうか？

そんなことを思っていると、義母さんが愛佳に話し掛けた。

「愛佳」

さっきまでとは違い、厳しい声になる。

「あなたは昨日、してはいけないことをしたわね」

愛佳はギクリと義母さんを見た。

「人の気持ちを勝手に言ったのはなぜ？いけないことだって、分かっているわよね」

愛佳は少し震える声で答えた。

「………翔良が、あたしを邪魔者扱いしたから……だから……」

「そう、だったら勝手に人の気持ちを言っても言ってもいいの？あなたは家事も出来ないわ。翔良さんにこれから迷惑をかけるのは目に見えてる。それでも残りたいって言ったのはあなたよ。これから邪魔にならないでやっていけるって、自信を持って言えるの？」

愛佳は唇を噛んだまま答えなかった。否定できないことが悔しいんだろう。泣きそうな愛佳をかばいたいけど、母子の会話に口を挟むのははばかれた。

義母さんは一つ溜め息をつく、愛佳にキツイ視線を向けた。

「愛佳。私が本当に怒っているのは、あなたが卑怯だったからよ」
ビクツと愛佳が肩を震わせる。

「自分の気持ちを言わずに人の気持ちだけを言ったのはどうして？
自分の気持ちを伝える勇気がないのに、人の気持ちを言うのは卑怯なことじゃないの？」

「……ごめんなさ……」

「あたしに謝らなくていい。謝る相手が誰だか分かっているでしょう？」

愛佳が一瞬黙った。その後つらそうに、でも悔しそうに眉をよせて口を開く。

「…………ごめん…………翔良」

「別に。気にしていない」

まるでたいしたことがないような、そっけない態度を取る。そんなアニキを見て、ふと思った。

アニキにとって、昨日のことにあまり意味はないのかもしれない。
恋愛感情じゃなくて、ブラコンの延長みたいなもの……だとか。いや、でもあのキスはやり過ぎな気がする…………。

「勇雄くん。顔を上げて、真剣に聞いてほしいの。これから愛佳が言うこと」

義母さんの言葉にゆっくりと顔を上に向けた。

愛佳が何か俺に伝えたいことがあるんだろうか？

「愛佳、ちゃんと言えるよね。自分のケジメをつけられるわよね」

愛佳はうなずくと、これ以上ないくらい真っ赤な顔で、でも、真剣な顔をして俺を見た。

何だろう？ そんなに大事なことなんだろうか。

「…………お……にいちちゃん、あたしね…………」

ガタッ

と、突然リビングに鳴り響いた。音のした方に振り向くと、アニキがイスから立ち上がっていた。

「……………アニキ？」

腕を掴まれて身体を立ち上がらせられる。俺の腕を掴んだままカバンを二つ、俺の分まで持つと、リビングから出ていこうとした。

「ちよつと！！翔良！！なんでお兄ちゃん連れてくのよ。あたしまだ何も言っていないのに！！」

ふと立ち止まると、アニキは愛佳に視線を向けた。

「ケジメをつける必要はない。お前は言わなくていい。黙ってる」

「な……んでっ！！」

「お前の気持ちをイサに伝える必要はない」

切り捨てるようなアニキの言い方に、愛佳の眉が吊り上がる。

「あんたにそんなふうに決められない！言うつたら言っ！！」

愛佳はイスから立ち上がると、早足に俺とアニキの方へと向かって来た。

なんだろう？と思っていると、愛佳に勢い良く制服の襟元を引っ張られて身体がぐらりとかしぐ。

「うわ…………っ」

転ばないように足を踏み締めると、目の前に首を精一杯のばした愛佳の顔があった。

唇が、一瞬触れる。

そのとたん後ろから腕を強く引っ張られて、すぐに離れた。

「行くぞ」

不機嫌な声が聞こえた。でも、思考が止まってしまったようになにも考えられない。体を動かせない。動かない俺を、アニキは引き連つて玄関へと向かった。

愛佳がその後から追い掛けてくる。

「お兄ちゃん！あたし、お兄ちゃんが好きだよ！！」

大きな声で叫ぶ愛佳の声が耳に届く。俺は驚いて振り返った。

それでもアニキの足が止まることはなかった。俺は無理矢理くつを履かせられると、玄関の外へと連れ出された。ボタンとドアの閉まる音がする。

「……………あのガキが」

地を這うようなアニキのつぶやく声が聞こえた。その言葉に反応することも出来ず、あれほど避けたかったアニキと登校することにも気付かずに、ただ呆然としたまま、腕を引かれて学校へと連れられていった。

柳ヶ瀬と俺

「う　　っす、早いな郡山」

教室のドアを開けると上半身ハダカの柳ヶ瀬がいた。

「……………ストリップ？」

そう聞くと容赦なく頭をはたかれた。

「これから部活なんだよ。大会近いから着替えて朝練……………って、おい。そんなに強く叩いたか？いや、叩いたけど。大丈夫か？郡山」叩かれたまま下にうずくまる俺を見て、柳ヶ瀬は不安そうに問い掛けてくる。

別に、そんなに痛かったわけじゃなくて、柳ヶ瀬の顔を見たら安心して気が抜けた。……………とは、言いたくなかった。

「お前のストリップ見たら気分が悪くなっ……………」

言葉を言い終える前に、さっきよりも強く叩かれる。

「いつって　　！！やり過ぎだろ柳ヶ瀬！！」

「うるせえ。このナイスボディに向かってなんて言い草だ。失礼な」

「失礼なのはいつものお前の言動だろ！！」

「いつもってなんだよ！！いつ俺がお前に失礼なことしたんだよ！」

……………おい、自分の口の悪さは無自覚か。柳ヶ瀬……………。

「もういい……………」

力無くそう告げて、俺は自分の席へ向かった。

寝不足で、これ以上言い合う元気がなかった。

椅子に座るとすぐに机の上につぶして腕に顔をうずめる。

少したってから、柳ヶ瀬が何もいわずに教室から出て行くのが分か

った。

自分の他に誰もいなくなった教室は、静かで眠けを誘う。

うとうとしていると、足音が聞こえて誰かが早足に教室に入ってくるのがわかった。

「イサ」

自分を呼ぶ声に驚いて顔を上げる。

「アニキ」

近付いてくる足音に、心臓の音が早くなった。

「柳ヶ瀬くんから、イサが具合が悪そうだと聞いた」

「……どうしてほつといてくれないんだろう。」

今はアニキと話したくないのに。

「イサ……」

アニキの手が、ひたいに触れる。

俺は勢いよくそれをはらった。

アニキの顔を見たくなくて、ぎゅっと目を閉じる。

「……イサ」

アニキの一步下がる音が聞こえた。

「……一人で、暮らすか？」

「……え？」

「もしイサがオレと一緒にいたくないのなら、愛佳を連れて親父たちとアメリカに行く」

また一步、後ろへと下がる。

「どうするかは、イサが決めるといい……」

遠ざかる足音で、アニキが少しずつ離れていのがわかる。

アニキが教室を出て行ってしまっただけから、目を開けられなかった。

……一人で……暮らす？

考えたこともなかった……。

ガツッ

と、何かの落ちる音がした。

「……悪い、聞いた。ジュース買いに行ったらお前のアニキと会ってさ、お前のこと言っただけ……なんか、言っただけ悪かったみたいだな。すまん」

柳ヶ瀬の慌てた声に少し可笑しくなった。

「……っ……ははっ。柳ヶ瀬が謝るの初めて聞いた……」

「笑うなアホ。ジュースやんねーぞ」

そう言ってから、下を向いた俺の顔を覗きこんだ柳ヶ瀬が驚いた声を出した。

「こ……郡山」

「俺が具合悪そうだからジュース買ってきてくれたのか？柳ヶ瀬が優しいなんて気味が悪いな」

「……」

柳ヶ瀬はなにも言い返さなかった。言い返さない柳ヶ瀬も気味が悪い。

ああ、でもそうか、俺が泣いているからか。

いくら柳ヶ瀬でも、弱っているやつにはいつもの毒舌を吐かないのか。

……アニキが教室を出ていく少し前から、涙が止まらなかった。

もう、どうしたらいいのかわからない。

いろいろなことが起こってなにも考えられない内に、また俺の驚くことを聞かされる。

張り付めていた気持ちが溢れて、涙腺が壊れた。

「……あ、あ　　っと……学校、サボるか……」

困ったよう柳ヶ瀬はそう言って、机に一部がへこんだ缶ジュースを置いた。

小さく目を開けると、冷えた缶から水滴が伝い落ちるのが見えた。

柳ヶ瀬のめったに見せない優しさが、胸にしみた。

b e t o o l a t e (前書き)

お久しぶり(すぎ)です。

b e t o o l a t e

風が、冷たかった。

足のつま先から身体がどんどん冷たくなっていくような気がして、靴のまま足先を擦り合わせた。

「風邪、ひくよな。このままじゃ」

柳ヶ瀬と駅で別れてから、家の前まで来てもう30分以上経つ。

柳ヶ瀬はなにも聞かず、二人で電車に乗って街へ移動したあと、ゲーセンやカラオケで遊んだ。平日の昼間なのに街にはちらほらと学生服の奴もいて、学校をサボってる奴が意外と多いことに驚いた。そして何事もなかったかのように柳ヶ瀬と駅で別れた。

少し、気持ちが晴れた気がする。

柳ヶ瀬のおかげだと認めるのは悔しいが、遊んでいるあいだに心の中でぐちゃぐちゃになって澱んでいたものが、体の外へと放出されて少し楽になった……気がする。

柳ヶ瀬のおかげだと認めるのはホントにイヤだが。

ただ、心は少し楽になったものの状況はなにも変わってはいなくて、もう帰っているだろうアニキと愛佳のことを考えると家の中に入るのがためらわれた。

「……くしゅっ」

しかし、もう冬に差し掛かろうとしているこの時期に学生服のまま
で外にいるのは本当に寒く、このままでは風邪を引くこと間違いな
しだ。

俺は意を決して玄関のドアを開けた。

バサッ

「お帰りなさい」

の声とともに何かが降ってきた。軽い。そして大きい。・・・
・・・バスタオル？

「はい、これ。そして早くお風呂入ってお兄ちゃん」

ぐいぐいと俺の身体を押す愛佳に戸惑いながらも、渡された服と風
呂一式セットをにぎりしめたまま風呂場へと直行した。

「・・・あ、愛佳？」

「早くお湯につかってあったまっで。もうきつとお湯沸いてるから。
ずっと外に立ったまま入ってこないんだもん、風邪引いちゃうよ」

「・・・ずっと見られてたってことか？」

ボタンとドアが閉じられ、愛佳の足音が遠ざかっていく。俺は冷た
くなった制服を脱ぐとため息をついた。

「愛佳のこと、きちんと考えないと・・・な」

いつもなら直ぐに外へと俺を呼びに来そうなもののに、じつと家で待っていた愛佳。

愛佳にもなにか思うところがあるのだろうか。

「・・・・・・・・あつたけ　　・・・」

ちやばんとお湯に浸かると、ここ二日程考えることを拒否していた脳がゆつくりとだけ回転しだした。

俺を好きだという愛佳。一体いつから？

俺を好きだというアニキ。本当にいつから？

愛佳はともかく、アニキと俺は正真正銘の兄弟なんだぞ。・・・・・・・・全然似ても似つかないけど。

アニキと離れて暮らしたい訳じゃない。

愛佳にもムリヤリ外国へ行かせたい訳じゃない。

今のままじゃいられないんだろうか。

いられないなら俺はどうしたらいいんだろうか。

「・・・・・・・・あがろっ」

お風呂と不本意ながらも柳ヶ瀬のお陰でリラックスした俺の脳は少し・・・・いや、かなり自分勝手な結論を叩き出そうとしていた。

だって仕方ないか？俺は恋愛初心者で、まだ誰とも付き合ったこともないし、誰かを強く思ったこともない。

だから、今回だけはズルイと思う自分の心にフタをすることにした。

それは後に全ての責任が自分に降り懸かってくることになるのだが、その時の俺にそんなことが予想出来るはずもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5488d/>

ブラザーCOMPLEX

2010年10月20日12時42分発行